

子育て、教育、学校についての誤った考え

—ミラーとニイル、およびラディカルな視点—

ジョン・ポッター（皇學館大學社会福祉学部助教授）

訳：松井宣明（関西大学大学院）

すべて真実は3つの段階を経過する。最初は相手にされない。ついで暴力的に拒絶される。そして最後には、自明の理として受け入れられている。

ショーペンハウエル

20世紀に入って、別々の領域で活動しているが、しかしそれは子供に関するものであるという点で重なっている、2人の重要なヨーロッパ人、ニイルとミラーが、期せずして、子供についての類似した見解をつむぎ出していた。この見解は、子供とその養育、あるいは教育についての今日のオーソドックスな信念にそって考えるとき、また21世紀が始まろうとする、いわゆる先進国のおよその現況にかんがみるとき、あまりにラディカルで自由主義的であるようにみえている。

サマーヒル校でのA.S.ニイルの仕事は、一同校はラディカルな自由主義的学校のなかでももっとも有名なものであるが—今日でも、イギリス政府の執拗な圧力にもかかわらず、娘のゾーイ・レッドヘッドの運営によって、成功裏に継続している。多数にのぼる、教育についてのニイルの本は、子供の自然な成長の大切さを強調している。また、アリス・ミラーは、ごく最近スイスで、子育てと子供虐待に関する著作を公にしたが、そこでの結論には、子供はきびしく育てられるべきだという考えかたに対して、ニ

イルと同質の思想がみられるのである。ミラーもニイルも、子育てや学校教育について、別々に考察を進めてきた。しかし、かれらの問題関心の領域はしばしば重なり合っていて、その共通の特徴として、子供の厳しいしつけ（ミラーはそれを「有害な子育て *poisonous pedagogy*」と呼んでいる）教育、あるいは学校教育システムの現状に対して、厳しい批判をおこなっている、ということが指摘される。

ミラーやニイルの思想には、たくさんのひとが熱心に耳を傾けてくれるわけではないし、ましてや広く受け入れられているわけでもない。しかし、2つの世界大戦、人種主義や民族浄化、拷問や殺人、性的虐待や児童労働、目をそむけたくなるような富と貧困の2極分化、そしてお金、権力、競争や市場の力に対する強迫観念、などなどを伴ったこの悲惨な20世紀を省みれば、結局のところ、物ごとから目をそらそうとする以外には、われわれの基本的な信条のところに何かラディカルな変化が求められている、ということ認めざるをえないのである。イギリスでも、この20世紀をとおして、ニイルの思想は、ほんの瞬間的にでも人気があったわけではないし、今日でも、権力者からは、時代遅れの、旧式のものだと見なされている。しかし実際には、ニイルの思想はやっと正当に理解されはじめたところであり、21世紀にむけて、新しい、ラディカルな、未来への見取り図たりうるものであ

る。

この100年のあいだ、多くの悲惨な出来事があったにもかかわらず、人々の状況には、ゆっくりにあるが確実な進歩が見られたし、子供とは何かということについても、革新的で変人扱いされる先駆者のあいだの問題であるだけでなく、その関心は、ひろく一般に拡大してきた。今日では、子供のトラウマ（心的外傷）に関するアリス・ミラーの仕事やその成果は、当初よりもはるかに重要なものだと考えられるようになったし、その数々の発見は、他の領域の権威者によっても実証されてきている。ニールの教育に関する仕事も世界中で支持者を増やしてきた。かれの思想に依拠し、またその影響を受けた学校が、北アメリカ、ニュージーランド、日本、タイ、その他各所で設立されているし、すこし名前を挙げるだけでも、イギリスのデイビッド・グリブル、クリス・シュート、あるいはプリン・パーディ、アメリカのダニエル・グリーンバーグ、日本の堀真一郎、韓国のウンサン・キムなど、現代の教育理論家たちがニールの哲学の核心を、それぞれの著書や仕事のなかで、さらに前進させている。

ミラーやニール、あるいはその支持者や反対者の考えは、これまで、たくさんの著書や論文のなかで詳細にわたって公表されてきている。この論文では、いわゆる「先進的」社会で広く行きわたっている、子育て、教育、学校に関する誤解、つまり誤った信念を、概観してみたいと思う。ミラーやニール、あるいは他のラディカルな理論家について、ほんの少しふれるだけで、よくある正統派的な立論が、その実、いかに誤った確信であるかが明らかになる。こういった誤りのいくつかを、以下に列挙していく。

子供をたたくのは有害ではない

アリス・ミラーの著書『沈黙の壁を打ち砕

く』(Breaking Down the Wall of Silence) の付録に収録されているジャン・ハントの「子供をたたいてはいけない10の理由」がある。もちろん子供をたたくと子供が肉体的にダメージを受けるというのはっきりした理由があるのだが、ハントは、そのほか、リストの最初に、次のような重要な例示をおこなっている。

子供をたたくという行為は、子供自身が、たたく人として育てあげられていくことを意味する。今日では、広範囲にわたる調査データによって、子供の体罰とティーンエイジャーや大人の暴力的振る舞いが、密接不可分の関係にあることが明らかになっている。ほとんどすべての凶悪犯が子供のとき、ひどい扱いを受け、罰せられていたことが明らかである。(168ページ)

体罰を受け、外に発散できなかった子供の怒りは、積み上げられ、後になって爆発する。もちろん、ミラー自身も、研究のなかで、ことに『魂の殺人』(For Your Own Good) のなかで、犯罪者の少年時代について、このことが真実であることを示している。

体罰は、たたいたりなぐったりするどのようなものであれ、「力は正義だ」というメッセージを子供に送ることであり、また弱小のものに暴力をふるって、恨みを晴らしても、それは許されるのだというメッセージを送ることである。不幸なことに、このメッセージは大人社会の生活場面のなかにも頻りに運び込まれていて、最近でも、アメリカ政府が(諸国に混じって)「正義の」戦争を口実にして、他民族の紛争に干渉する権利があるといって介入したような、その20世紀末版すらある。こうして、体罰に関する考え方は、はやくから子供のなかに擦り込まれ、それが問題を解決する通常の方法なのだ、というメッセージが学習される。

ハントは、家族のなかにおいてさえ、体罰の使用は、親子のきずなを損なうようだと書いている。親の求める良いおこないは、罰によっては誘引されない。それは、せいぜい表面的な行為を導くだけである。期待された「良い」おこないは、結果として、さらなる体罰を避けるための、あるいは恐怖に根ざして演じられる、一種の表面的なパフォーマンスにすぎないだろう、という。ハントの結論は次のようである。

恐怖によって生み出された表面的な「良い」行為ではなく、強固な内心の価値にもとづく真実の道徳的行為を学習させるただ一つの方法、それは愛による支えである。強い内面的価値は、自由のなかで生まれ、恐怖のなかでは育たない。(171ページ)

これより数年前、ニールはその著書『ニールの教育—サマーヒルを語る』(Talking of Summerhill)のなかで、たたくことは正しいか間違っているかという質問に答えて、ほぼ同様の見解を述べている。

良いとか悪いとかいった問題ではないでしょう。ある意味では、卑劣さの実例ともいえましよう。というのも、あなたは、自分より小さいだれかをたたいているのです。夫がうるさいからといって、夫をたたきますか。一般的にいて、それは子供とは何の関係もありません。大人の、怒り、フラストレーション、あるいは憎しみなどはけ口にすぎないのです・・・たたくことは、ぜんぜん、愛の行動などではありません。子供に恐れを植え付ける、そんなことをできる権利は、だれにもないでしょう。あなたは子供の愛を失いますが、たたいた後で子供がみせる悔恨の態度は、拒絶によって生み出された、ウソであり、不誠実であるにすぎません。(55-6ページ)

いま、暴力や、子供に対する体罰の使用は、ほとんどの社会でますます見えにくくなってきている。家庭であれ学校であれ、身体への処罰は、若干の国々で、政府によって禁止されるようになってきたが、ミラーは、子供の擁護のために、さらに先へ進む。『魂の殺人』のなかで、ミラーは「有害な子育て」の概念について述べているが、それだけでなく、それに対する「温和な子育て」(gentle pedagogy) などというものも存在しないのだと述べている。論文「お置つきについて考える」(An Invitation to Think about Spanking)のなかで、ミラーは、ピシャットやったり、あるいは手を軽くたたくような、あきららかに無害と思われるような働きかけでも、赤ん坊にとっては危険だ、と述べている。ともかく、赤ん坊は愛されることを必要としているし、ピシャットやればこの関係は絶たれ、かわりに暴力を教え、不安を引き起こすことになる。このことは、前にふれたミラーの本のタイトルに示されている、子供の「善性そのもの」が罰せられてしまうという理不尽な主張を、子供が受容するように、積極的に動いているということの意味するのである。ミラーは、赤ん坊は、長期にわたるたくさんのレッスンを通して学習していくのだという。次のようなことである。

1. 子供を大切に扱う必要はない。
2. 善なるものは、罰を通して学習される。
(もちろん間違いである。なぜなら罰を与えることは、子供に、罰を与えたいと望むようになることを教えるからである。)
3. 苦痛は感じられなくなり、慣らされてしまうだろう。(それは免役システムに問題を生じる。)
4. 暴力は愛の表現である。(こじつけを含んでいる。)
5. 感情を否定することは健康的である。(し

かし、しばしば後になって、体がこの代償を支払うことになる。)

6. 大人になるまでは、子供はあれこれ言い訳してはならない。

現在、子供に対する体罰を禁止する法律を持つ国は10ヶ国ある。スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、デンマーク、オーストリア、キプロス、イタリア、クロアチア、ラトビア、そしてごく最近のイスラエルである。悲しいことに、イギリスはまだそういう国の仲間には入っていない。ミラーはイギリスの首相トニー・ブレアへの公開書簡で、次のように言った。

責任ある政府ならば最新の科学的発見を無視することは許されないだろう。もし政府が本当に平和な未来を望んでいるならば、親が自分の子供に暴力を振るうようけしかけるようなことをするわけがない。そうではなくて、政府は親に、あたらしい世紀の始まるに当たって、子供に対する体罰は危険なことであるし、無効であると、はっきりしたメッセージを送らなければならない。市民は、責任のある政府の作る法によって、子供時代に敵意がつむぎ出されることや、暴力なしで子供とのコミュニケーションをおこなう新しい方法を学ぶことで、暴力をどのように避けることができるか、学習する必要がある。子供をたたくことで、子供に破滅への学習をすすめさせれば、結局、社会全体がそのつけを支払うことになる。(2000年1月21日)

子供は親を尊敬し、従順であることを学ばなければならない(略)

子供は道徳を教えられるべきである

子供は、大人が教えることで道徳を学習する

ことができる、という仮説は、学校においても、あるいは、良いこと悪いことに関しては、殊に親の指導が必要だと広く信じられている家庭においても、大いなる神話だといえる。

しつけに関する実践や指導書にしたがって、従順な子供を作ろうとした、これまでの子育てのありかたは、「良い」行動や、根底的によりよい社会を作る、という点で、ほとんど効果がなかったと、いうことを示している。大人は、その社会の若者の価値観、規範、あるいは一般的道徳意識が低下していることを、いつも嘆いている。しかしここでは、大人だけが良きものを知っていて、子供は大人の行動に関するお手本を学ばなければならない、ということが前提にされているのである。—実際に、その行動が教師や生徒にとって必然性があるかないかということはまったく関係なく。—

ここには、子供が罪を背負って生まれ、その後の長い道徳意識の訓育の過程を経て、やっと善に到達するという、キリスト教主義を起源とする信念が存在している。しかし、子供は罪深いものというよりは、良きものとして誕生する、という理解が一般的な日本などの社会でも、道徳的価値を教えることが必要だという考えが受け入れられている。親、あるいは大人が、どのように「善」に至るかを教えられなければ、子供は必然的に「悪」に至る、と恐れているのである。(何一つそのような証拠はないのに。)

こういった子供に対する対応は、ほんの幼児期のおトイレの訓練から始まって、若者の行動を型にはめ、コントロールする試みにまで至る。ホーマー・レインは、『親と教師に語る』(Talk to Parents and Teachers)のなかで、子供について語っているが、それはいまに至るも、ひろい支持を受けているとはいえない。レインは、20世紀始めにおこなった子供共和国(Little Commonwealth)の実践をとおして、ニールにインスピレーションを与えたのであるが、ほと

んどの人は「子供が、気ままにすることを通して悪い習慣を発達させると信じているが、しかし実際は、子供は気ままにすることを妨げられることを通して悪い習慣を発達させているのだ。」と書いている。(p.42)

ニールはこの考えを継承し、それを実践に移し、のちにサマーヒル校において多大の成果をあげた。ニールは、子供がまだ受け入れ態勢がないのに、道徳を強制しようとするのは、必ず失敗するだろう。—たとえその時でなくとも、子供は後になって、その抑圧的なしつけに対して必ず反抗するようになる、と。ニールは、子供の道徳意識は強制されなければ、自然に成長・発達していくものだとして理解していた。次のように書いている。

実際のところ、大人はすべて、子供の本性は改善されるべきだと信じている。だから、親はすべて、子供が小さいうちから、生き方を教えようとする・・・しかし、子供を悪くするのは、道徳の教え込みなのだ。悪くなった子供に教え込まれている道徳を打ち砕くだけで、あきらかに、子供は良くなる。大人による道徳の教え込みが必要だということも、ずいぶん疑わしいことである。どんな場合にあって、子供に対する道徳の教え込みなどは不要である。(『人間育成の基礎』Summerhill p.221)

自然な成熟を待つことなく、外から押しつけられた道徳を従順に受容した子供は、将来、自分の子供に同類の意味のない体制を押しつけ、また他者に対して、何が誠実であり、何が誠実でないのかを識別できない大人になっていくだろう。ミラーは、結局のところ、このような子供の養育は、たとえば、政治家が本心でいっているのか、あるいは単なる空文句を並べているのか、識別することができないような、能力の

喪失をつくり出すのだ、と言っている。

子供を扶養し教育するわれわれの全システムは、権力者一選択した一定の目的に到達するため張りめぐらされた、レディーメイドの鉄道網を徹底的に求めつづけている—のためにしつらえられている。かれらは親や教育者が装填をすませたボタンを押すだけですむのだ。(『禁じられた知』Thou Shalt Not Be Aware p.20)

子供は汚い言葉から保護されるべきである
(略)

子供は学校へ行かなければならない

歴史的には、子供が学校へ行くよう強制されるようになったのは、比較的最近のことである。イギリスでは、教育の普及を義務づける法律が可決されたのは、やっと1870年になってからであり、ほかの多くの西ヨーロッパ諸国よりも遅いものであった。ショットンは次のように言っている。

1870年教育法を導入した国家の主要関心は、学校の教育課程を国民化することにあった。・・・たとえば賞罰といった露骨な方法にみられるように、大人には、子供に対する権力が付与され、その結果、子供はうやうやしく、従属的で、礼儀正しいことが求められる受動的な存在として扱われるようになった。(『いづれにしても主人は不要だ』No Master High or Low p.4)

日本では、すべての6歳児が、すくなくとも4年間の学校教育を受けねばならないという法令ができたのは、1872年のことで、イギリスよ

りちょうど2年後のことであった。この義務教育には、イギリスでも日本でも、たくさんの親子が、激しく抵抗した。実際、イギリスでは、最終的には子供に対する義務教育が受容されることになったとはいえ、1889年以来、くり返し、学校破壊をとまなう、生徒による、無数のストライキがあった。ことに1920年代には、学校ストライキの昂揚があった。この種のストライキはしばしば親と子が一緒になって引き起こし、体罰反対をかかげたり、時間短縮、休暇拡大、宿題の廃止、あるいは学校給食廃止などを求めておこなわれた。

このように、学校教育は、一般に考えられているような自然な、順調な事態のなかで普遍的に登場してきたものではなかった。子供を家族から無理矢理引き離して、かれらを家屋に収容し—いわゆる通所監獄をモデルとした—、そこに静かに坐らせ、ものごとを一番よく知っていると想定された大人から知識を教授されるのは、主として、産業化社会において、文字を解し、道徳的にも従順な労働力を創り出していく、政治的な動向として産み出されてきたものだと思われる。

子供を、まさしく同一年齢である他の子供といっしょに、一日中1つの部屋のなかに閉じ込めておくというのは、きわめて不自然なことであるし、20世紀の初頭においても、まだ、多くの人から問題の多いことがらだと見なされてきた。登場してきた学校が、子供の自然な才能を抑制し、あらかじめ定められた社会モデルに適合するようにしつらえることで、子供に一定の価値観を注入しているということが明らかであるにもかかわらず、学校制度についての考えは、今では大人には広く受け入れられるようになっている。—子供の場合は、常にそうだとは言えないが。—

こういうことに対するオルタナティブは、大人が先導するのではなく、大人に支えられなが

ら、子供が学びたいことを、いつでも、どのようなかたちでも、また何でも、学べるようになっていることである。このことを実現する一つの方法は、学校を、強制された学習の場ではなく、またすべての年齢の子供が自由に行き来し、自分のペースで成長していく本当の学習の場に変えていくことである。ニールが言ったとおりで、学校は子供に適合しなければならないし、他に道はない。イギリスや日本、その他で最近増加傾向にある不登校は、この考えがまだ一般化していないことを示している。ニールが何年も前に、不登校をしている息子の親に答えているが、今日、まさにピッタリであろう。

たぶん、学校は退屈で、息子さんは活発だ、ということです。一般化していえば、不登校は、学校が良くないことを示しているのですね。できたら、息子さんをもっと自由で、もっと創造的で、もっと愛情あふれる学校に通わせてあげたらどうですか。(『人間育成の基礎』 p.313)

しかしながら、学校の難問を解決しようとする場合、今日、解決策と考えられているもの、たとえば1クラスあたりの子供の数を減らそうという要求、あるいは教育設備にもっとお金をかけようという要求、などなどは、通常は表面上のことがらにすぎない。元気いっぱいの子供が、結局、どうして学校へ行かなければならないのか、また興味を引くこともない授業に出て静かに坐っていなければならないのか、というもっと根源的な問題は、ほとんど問われることはない。

ニールは子供時代は「遊びの時代」であるべきだが、子供は十分遊べていないと信じていた。かれは、学習に関しては(子供が教室でだけ学習しているような場合でも)あらゆるかたちの強制を廃止し、コミュニティーに、愛と自由の

環境を整え、すべての年齢の子供が一緒に、幸福に過ごせるような学校を創ろうと決心した。何人かがかれの考えを継承した。アメリカでは、ダニエル・グリーンバーグがサドバリ・パレー校をもう何年も経営しているし、世界中で講演し、また教育における自由について、自分の考えを文章にしてきた。かれは、1999年の日本の講演で、信じていることができるただ一つのことは、次のことである、すなわち、いま普通の学校で学習されていることはすべて、21世紀には完全に無用のものになり、時代遅れのものになるだろう、と述べている。たしかに知識の蓄積が進み、技術革新の限界が克服されるにともなうて、学習とは受動的に受け入れるということだとか、子供は水を注入される壺のようなものだとか、あるいは教育とは「伝達」ということだ、などといった古い考えは、これまで以上に時代遅れなものになっていくだろう。

しかしながら、学校に全員が行かなければならない、という考えを放棄した人々もいる。アメリカでは、「在宅学習者 homeschooler」として知られる人々は、1990年代には100万家族を超え、なお増加中である。学校へ行かない理由はさまざまであり、すべての在宅学習 (homeschooling) や在宅教育 (home-based education) が上に述べたような理由で説明されるわけではない。

学校で学ばないさまざまな理由に加えて、オルタナティブに選択できる、実に多くの教育手段も存在する。メイハンとトゥーグッドは、『教育における選択の研究』(Anatomy of Choice in Education) という本のなかで、在宅教育に加えて、ミニスクール、スモールスクール、地域教育、自律学習、あるいは随時学習などについて概説している。ただ、学校を延命させようという考えを拒絶したジョン・ホルトは、かれの『なんで学校へやるの』(Teach Your Own) のなかで、すでに在宅学習についても原則的な反対

を表明している。

イギリスでは、最近、ジュリー・ウェブが、現在20歳代から30歳代になっていて、学校教育を全面的に、または部分的にしか受けなかった人々について研究し、成果をまとめた。その結論のなかには、次のような見解がみられる。

家庭で教育を受けた子供は、学校が提供するよりも、より大きな学習機会を持ち、人為的な学科の枠や時間の拘束がないので、一つの活動に深く没頭することができる。(『わたしたちは学校へ行かなかった』Those Unschooled Minds p.84)

このことは、創造性に対する有効性、あたらしい関心領域に出会う可能性、あるいはそれを現在の関心領域と結びつけることができる、という可能性に導くものであった。ものごとをはっきり表現できるようになり、家族関係が良くなることも明白であった。在宅教育の、より長期的な「効果」については、大人に関して、次のようにもいわれている。

全面的に家庭で教育を受けてきた人は、例外的なほど社会的能力に恵まれていたし、広い年齢層の、また多様な生育歴の人々と混ざり合ってきたお陰で、またアイデンティティーに関するしっかりしたセンスを造りあげる時間とチャンスがあったお陰で、はやい時期から成熟することができた。(p.85)

学習は早く始めるほど良い (略)

自由を与えすぎると子供は怠惰になり、自己中心的になる

自由は—とくにラディカルな自由主義者が擁護する自由、あるいはサマーヒルのような学校

で実践されている自由の場合—四六時中「何もせずに」ブラブラしている子供が、結局は、何事においてもキチッとできず、外の世界で大人の生活に適応できないように、最終的には問題を残してしまう、というのが一般的な不満である。しかし、はっきりしているのは、こういった恐れはどこにも見あたらないということである。最近のサマーヒル校の監察報告を掲載している教育雇用省の脅迫的文書においてすら、昨今、サマーヒル校の子供は活動的であり、自分たちの関心を追求することに没頭しているのは明らかである、としている。いったい、子供が「何もしない」などということはありません。—そのように見えているのは、しばしば、もっとも思索し、反省し、空想に集中している時間であり、感覚や感情の体験をし、世界を理解しようとする試みをおこなっている時間である。イギリス政府の暴力的行為が示すことは、政府が、教育にはいろいろな目的や方法があるということ認めようとせず、また認める能力を欠いている、ということである。知識だけが重要であり、教育の社会的、情緒的側面などはほとんど無視される。大人になってからのフィードバックについていえば、さきにふれたウェブの学校に通わなかった子供に関する研究や、またずっと前になるが、バーンスタインのサマーヒル校の卒業生に関する研究は、(『今日の心理学』Psychology Today 1968年10月号所収) 一般的には積極的な「結果」が発見されるという。

ニールは、怠惰な子供にはこれまで出会ったことがないが、確かに、子供はすべて、利己的で、自己中心でないように教えられなければ、利他的にならないと書いている。かれは、そのためにも、子供は自由のなかで育つ必要がある、ということを一瞬も疑わなかった。

学習する、しないということについて、子供は完全に自由でなくてはならない。もちろ

ん、実際にはすべての子供は学習している。というのも、そうすることが自然だからである。しかし、強制の下では、ほとんどの学習は、子供自身が魅力的で、価値があると考えている学習を禁止してしまう、望まざる仕事となってしまう。自由の国では、子供は、生活上の嫌な仕事をすべて逃避してしまう、と言ひ募る批判者に対しては、わたしは、もし望むならば何年でも、一日中遊ぶ時間が許されるようなサマーヒル校の子供も、入学試験にはパスしていると、言ってやるができる・・・何回も言ってきたように、学習という事柄は大したことではない。大切なことは、自由の下で子供は何ごとか、たとえば立派にやり通す誠実さ、自立的で適応力のある人生に対する態度、あるいは世界中の規律集や教科書が与えることができない、それどころかむしろ制限するような、人間や事象に対する興味、を獲得することであって、強制システムの下ではそうはならないということ、なのだ。(『知識よりも感情』Hearts Not Heads in the School pp.103-4)

実際のところ、子供が大人になる前に、自然に備わっているエゴイズムを、「誠実さ」や成熟にまで変えていくのを助ける問題関心の持続や、自分自身で事柄を見つけだすようさせるのは、この自由なのであり、これによって、子供は大人の生活に必要なものを自信を持って獲得できるようになるのである。自治のしくみが存在する学校では、子供は、民主主義や意思決定について、ミスを犯したり、責任を負ったりしながら、厳格主義による家庭や学校で育ててきた子供よりも、ずっと多くのことを学ぶことができるのである。子供のためにすべてが整えられ、子供は大人によってしつらえられた狭い道をたどらなければならないという状況のなかでは、子供は、自分が何に興味を持っているのか

見つけだしたり、ほんとうに役に立つことを学んだりするチャンスを逃し、さらに将来は、自由を恐れるように育ってしまうかもしれない。自由を与えるということは、責任を負うということであり、必然的に、成熟を高めるということの意味を意味する。しかしながらいまだに、ほとんどの社会で、どのような形であれ、まず、真の意味の意志決定や民主主義の練習の経験を与えることなく、若者たちに賢明な決定をし、政治にかかわる投票をするよう求めるのである。

もちろんこのことは、子供が完全に突き放されて、独力で生きていくべきである、ということではない。求めれば、子供はもちろん大人から支援を得ることができるのである。ここでのキーワードは、「援助 support」という言葉であるが、ニールやミラーは、子供が求めているのは指導ではなくて、援助なのだという点で期せずして一致している。

ニールの著書『知識よりも感情』からのメッセージは、すでにタイトルからも分かるように、感情はほとんどまったく無視され、知識だけが過大に強調されていて、子供は指導されるべきだと広く公認され、子供は大人の決めた学習の途を歩まされるのである。教育の分野について独自の研究をしてきた、スイスの心理学者 J・コンラッド・シュテットバッシャー J.Konrad Stettbacher は、最近同様の結論に至っている。感情や感覚の重要性を主張し、それを「生命の後見人」と言っているが、彼はそれをオープンにし、自分自身でそれを導いていく必要性を説いている。

現代は、知的な技巧やまばゆいばかりの知識が賞賛され、報酬を受ける、という時代である。しかし、進化論的に言えば、知識がこのようなもてはやされるようになったのは、比較的最近のことにすぎないということが、つねに忘れられている。数百万年にわたって、

生命を導き、方向を与えてきたのは、感情と感覚だったのだ。この能力を抜きにしては、生命は存在しなかったし、また存続することもできなかったであろう。それはわれわれ人類の後見人であったといえる。そのようであるから、それはわれわれのもっとも大切な資産であるともいえるのである。(『苦痛を正当化する』 Making Sense of Suffering p.111)

子育て、教育、あるいは学校に関する誤解は、このほかにもたくさんあるが、これまで述べてきたことは、あまりにも誤った信念が流通しているということで、それらのなかでも比較的重要だと思われるもののアウトラインを示し、要約を行った。これらが誤解だとするならば、そのような誤解がなぜかでも多数の人々によって易々と受け入れられているのかということが次に出てくる。

ミラーは自著のなかで、ガリレオの、太陽は太陽系の中心にあり、地球は自転するという、当時、「滑稽であり、哲学上間違っており、理論的に異端であり間違いである。」とみなされた17世紀の議論の例を示している。これはガリレオを沈黙させ、裁判に引き立て、拷問の脅しや、最後には自宅幽閉に導いた。多分、より文明化されているわれわれの時代にあって、教育に関連して生起するもろもろの事柄についての誤解は、政府や現体制によって支えられ、しばしば打倒することなど不可能なようにみえている。それらを破棄することができれば、多くの場合、さまざまな理由でたくさんの人々を立ち止まらせてきた、ラディカルな社会変革を生み出すことができるだろう。同書で、ミラーは、次のように、問題を心理学的用語を使って説明している。少し長い引用する価値がある。

あるくつろいだ夕方、新聞の読者は、平穏な日常を乱されることなく、新聞が報道する

あらゆる種類のショッキングな出来事に目を通している。そこには妻と3人の子供を刺殺し、その後みずからも命を絶った父親の記事がある。この男はまじめな勤め人で、それまでの行動に何の異常もなかった。読者は自分の教育程度や関心に従って、それぞれ次のように思うだろう。「男は生まれつき精神病者だったのさ。それを今まで隠してきたのだよ。」また、「住宅難や仕事のストレスが男を妻子殺しに追いやったのだ」と。同じ新聞は、テロリスト、その若い男は大量殺人の罪で告訴されているのだが、かれが1時間にも及ぶイデオロギー的演説をぶっている裁判を載せている。そこでは、母親のインタビュー記事もあり、母親は、自分の息子は、大学へ行くまでは、子供のときも、青年になってからも、一切問題を起こしたことはないと述べている。そこで読者は、他の学生、すなわちあまりにも奔放に育てられてしまった学生からの「悪い影響」が、この男をテロリストにしまったのだという「明白な」結論に到達する。誌面をパラパラとめくりながら、読者は今度は、囚人一人ひとりに個室を与えるような「豪華な」刑務所のなかで、自殺率が増加しているという他の記事に目を移す。これらの記事で、読者は、「現代人はなんてダメにされているんだろう。高い生活水準が、ますます不満を増大させるし、いま若者がかわっている暴力行為はあげて、野放図な子育てから生まれてきている。」と叫び出す。このような説明は読者を満足させ、そしてその価値体系をさらに強固にしていく。かれら読者には、問題になっている出来事は個人的には重要なものではない。読者は基本的にどうして、やさしい父親が、突然、3人もの子供を殺すことができるのか、どうして、従順な息子がいとも簡単にテロリストに転じることができるのか、またなぜ独房の囚人は自殺する

のか、ということを基本的には「知りたくない」のである。というのは、かれらの適応の様式が、これからもうまくいって、危うい陰の部分を持たず、また同様に、常にそのような部分から距離をもって営まれるだろうと、誰も保障することができないからである。(『禁じられた知』pp.111-2)

しかしながらこれまで見てきたように、ここ100年間のあいだに子供への対処の仕方は変わってきたし、あるいは、子供を育て、教育し、また鍛錬することの問題性についての新しい見識が、—その解決方法は表面的で、皮相なものであったにしても—徐々にではあるが進んできている、ということも事実である。ミラーやニールのようなラディカルな思想も、いろいろな領域で支持者を得ているし、もう100年もすれば、次の世代が現れて、その理論を修正し、発展させ、さらに何かを付け加え、最終的には大衆的に受容されていることになるだろう。

文献

de Mause, Lloyd(Editor). The History of Childhood: The Untold Story of Child Abuse. London: Bellew, 1991.

Greven, Philip. Spare the Child: The Religious Roots of Punishment and the Psychological Impact of Physical Abuse. New York: Vintage, 1992.

Holt, John. Teach Your Own. Aldershot, Hampshire: Ashgate, 1982.

(ジョン・ホルト『なんで学校へやるの アメリカのホームスクーリング運動』大沼安史訳、一光社、1984)

——. Never Too Late. Ticknall: Education Now Books, 1993.

Lane, Homer. Talks to Parents and Teachers. London: Allen and Unwin, 1928.

- (ホーマー・レイン『親と教師に語る 子どもの世界とその導きかた』小此木真三郎訳、文化書房博文社、1976.)
- Meighan, Roland, and Philip Toogood. *Anatomy of Choice in Education*. Ticknall: Education Now Books, 1992.
- Miller, Alice. *For Your Own Good: Hidden Cruelty in Child-Rearing and the Roots of Violence*. London: Virago, 1992.
(アリス・ミラー『魂の殺人』山下公子訳、新曜社、1983)
- . *Breaking Down the Wall of Silence: To Join the Waiting Child*. London: Virago, 1992.
(アリス・ミラー『沈黙の壁を打ち砕く 子どもの魂を殺さないために』山下公子訳、新曜社、1994.)
- . *Thou Shalt Not Be Aware: Society's Betrayal of the Child*. London: Pluto Press, 1998.
(アリス・ミラー『禁じられた知』山下公子訳、新曜社、1985)
- . 'An Invitation to Think About Spanking' (Undated article).
- . 'Open Letter to Tony Blair', 21 January 2000.
Neil, A.S. *A Dominie Dismissed*. London: Herbert Jenkins, 1917.
(A.S.ニール「クビになった教師」、『ニール著作集』10、堀真一郎訳、黎明書房、1976)
- . *Hearts Not Heads in the School*. London: Gollancz, 1967.
(A.S.ニール「知識よりも感情」『ニール著作集』5、霜田静志訳、黎明書房、1968.)
- . *Summerhill*. London: Gollancz, 1962.
(A.S.ニール『人間育成の基礎』霜田静志訳、誠信書房、1962.)
- . *Talking of Summerhill*. Gollancz, 1967.
(A.S.ニール「ニールの教育 サマーヒルを語る」『ニール著作集』9、霜田静志訳、1974.)
- . *The New Summerhill*. Ed. Albert Lamb. Hamondsworth: Penguin, 1992.
- Shotton, John. *No Master High or Low: Libertarian Education and Schooling in Britain 1890-1990*. Bristol: Libertarian Education, 1993.
- Shute, Chris. *Compulsory Schooling Disease: how children absorb fascist values*. Nottingham: Educational Heretics Press, 1993.
- Stettbacher, J. Konrad. *Making Sense of Suffering*. Hamondsworth: Meridian, 1993.
- Webb, Julie. *Those Unschooled Minds: home-educated children grow up*. Nottingham: Educational Heretics Press, 1999.
- Wills, W. David. *Homer Lane*. London: Allen and Unwin, 1964.
- ノート：前出アリス・ミラーの論稿のうち'An Invitation to Think About Spanking'('お仕置きについて考える')および'Open Letter to Tony Blair'('トニー・ブレア首相への公開書簡')は、ウェブサイト The Natural Child Project でアクセスできます。
<http://www.naturalchild.org/>
- 訳註：本文中の引用図書で訳書のないものには、仮に日本語の書名をつけています。引用ページはすべて原著書のページです。訳書が刊行されているものについては、文献一覧に付記しました。